

## 「主体的・対話的な学びを育てる社会科指導の工夫」

### 【研究の内容】

第1回 7月22日（土）

（1）定期考査問題を持ち寄り、協議した。協議の中で、以下の提案、まとめがされた。

- ・定期考査の出題のねらいをどこに置くかが大切である。知識を定着させる目的もあるので、知識を問う問題が多くなるのも一つの考えである。
- ・問題用紙の表紙に「出題のねらい」を記入するのも、1つの方法である。  
例）「世界の姿と地図の見方について基礎的な知識や技能を身に付けているかを確認する。」
- ・「地図帳の持ち込み」を条件に出題するのも、1つの方法である。公平性の課題はあるが、地図帳の使い方を問う問題としては、ありうる。他教科の先生方へ、事前に十分説明しておく必要はある。
- ・思考を問う問題として、文部科学省の中学校卒業認定試験等の問題を参考にするのも1つの方法である。HPに掲載されるので、毎年取っておくとよい。
- ・思考を問う問題として、複数の資料を組み合わせ、読み取り、考えさせることが大切である。

（2）発表報告として、以下の実践報告がされた。

- （i）北区立浮間中学校での実践「身近な地域調査」の指導案・授業について
- ・学年学級経営研究指定校として、「QU調査を活用した学力向上のための指導法の工夫・改善」を研究主題に取り組んだ。
  - ・全4時間で単元構成されている。小学校での学びや冬休みの課題として行った「フィールドワークと地域住民へのインタビュー」を組み合わせ、効率的な単元構成である。
  - ・上記を踏まえて、「浮間地区はなぜ集合住宅が増えているか」という課題設定をし、新旧の地形図やグラフ、分布図等を活用して、検証し、根拠をもって説明する力を身に付けさせた。
- 地理的分野の最終単元として、「身近な地域調査」には必ず取り組む。  
ここで実物資料や身近な生活にかかわることにより、3年次で行う公民的分野につながっていく。

（3）先進事例として、「ジグソー学習」について紹介があり、協議した。

- ①子供一人一人に、考えることについて責任をもたせることが大切。指導と評価の一体化につながる。
- ②実施するにあたっては、原稿を教師側が詳細に用意する。
- ③グループの組み方については、配慮が必要な場合もある。

④誤った知識の習得があった場合は、教師が修正する。

(4) 講師の先生より、2点について指導があった。

①東京学芸大学附属世田谷中学校の公開研究会の「アフリカ州」の指導案の紹介

・単元を貫く学習課題設定について

第1時「なぜアフリカには経済的に貧しい国が多いのだろうか」

追及をしていくことで、新たな学習課題の設定へつなげる。

第5時「どうすれば、アフリカの貧しい国は経済的に自立できるのか」

・アフリカは貧しいという印象だけで、授業を作らない工夫が必要。絶対的貧困と相対的貧困の両面で考えを深めさせてみる。また、「カカオ農園の子供たちにチョコをあげるかべきか」等価値判断を求める問いを投げかけることは大切である。

②中教審答申について

・新学習指導要領の読み方や深め方について、「中教審答申を読み解く」(石井英真著)を題材に、ご指導いただいた。

第2回 12月23日(土)

(1) 各自の研究授業の指導案を持ち寄り、協議を進めた。協議の中で、以下のことがまとめられた。

①思考を促す工夫として

・いくつかの立場をあげて、その立場で考えさせる。

→多面的・多角的な見方・考え方へつながる。

例) 承久の乱について：幕府の立場、朝廷の立場、武士の立場等

②話し合い活動を活発化させる工夫として

・テーマをしぼる。話しやすいテーマにする。

・教科だけでなく、特活や行事等を活用する。3年間やり続けることが大切。

・これまで学習してきたことが生かせるようなテーマ設定が必要。

<話し合い活動だけになり、内容が伴わない場合、どうしたら良いか?>

★目標設定が大切。何のために話し合わせるのか、教師側が明確に目標をもつ。

★発問の作り方が大切。身近な例を出す等の工夫。

★生徒の意見を取り上げ、また広げ、深めるには、教師のコーディネート力が求められる。

★話し合い活動に入る前に、生徒に考えさせるスキルが身に付いているかは、とても大切である。また、知識の基礎・基本の習得も大事である。さらに、教師側は、考えさせるデータをそろえる必要がある。

★年間指導の過程として、まず1対1での意見交換から始めるのも1つの方法である。そして、グループに広げていくなども工夫の1つである。時間をかけて指導していく必要がある。

### ③単元を貫く課題について

- ・単元構成が何より大切である。「深い学び」につなげるには、相応の時間構成が必要である。→年間指導計画の吟味
- ・自分の考えを作るには、追究の時間を多くとることが大切である。
- ・大人に提案する課題設定も、1つの工夫としてある。
- ・前時等に学んできたことがつながるような課題設定が大切である。例えば「この間学習してきたことは、『こうだったのか！』『こうつながるのか！』『次はどうなるんだろう？』と思わせるようなものが良い。このことが、「学びに向かう力」となる。

<パフォーマンス課題の作り方の留意点は何か？>

- ★視点をしっかり生徒にもたせることが大切。例えば地理であれば、地理的な見方・考え方の視点を入れる必要がある。
- ★多面的・多角的な視点であるかどうかの吟味が必要。

### ④小学校の学びを生かす手立てについて

- ・中学1年生にとって、小学校の学習内容の想起は、有効である。積極的に使う必要がある。
- ・導入に使うのは、1つの工夫である。
- ・教師が意図的に生徒へ「これは小学校で習っているよね」「これは小学校で習っていないところだよ」という発言をすることも、1つの工夫である。
- ・新学習指導要領では、小中高の接続が大切にされている。小学校の学習指導要領や教科書についても研究しておく必要がある。

### ⑤「身近な地域の調査」について

- ・総合的な学習の時間と組み合わせて、地域調査することは有効である。
- ・社会科としては、生活舞台を対象として、地形図の読み取りや観察等実施方法を学ぶ「地域調査の手法」(技能)を中心に行うと良い。

(2) 先進事例として、以下について紹介があり、協議した。

(i) 「パフォーマンス評価から構成する中学校社会科単元設計—アジア州の単元開発—」について

- ・パフォーマンス課題を設定することで、多様な見方・考え方を養うことができる。
  - ・指導と評価の一体化を図るため、ルーブリック評価を取り入れる。
- 「見方・考え方」がパフォーマンス課題に現れているか、次回に検証・報告する。

(ii) 東京都研究開発委員会検証授業から

「武家政権の成長と東アジアの導入」について

- ・小学校の知識を活用して、中世全体の流れをつかませる。中世の「単元を貫く課題」を自ら設定することで、「学びに向かう力」の動機づけを行わせる。

→「学びに向かう力」については、次回に検証・報告する。

(3) 発表報告として、以下の実践報告がされた。

(i) 「全国中学校社会科教育研究会島根大会」「関東ブロック中学校社会科教育研究会川越大会」の参加者より、報告がされた。

(ii) 「法教育」の授業実践事例発表として、指導案について、以下の報告があった。

- ・「現代社会をとおして、らえる見方や考え方」の授業から、よりよい決まりをつくる活動を通して、「効率と公正」について考える。
- ・自分たちがつくった「決まり」について、法律実務家の先生のアドバイスを受ける。

(iii) 「よりよい授業をするための学習指導案の書き方ー学習指導案からよりよい授業をデザインするー」について

- ・都中社研研究部専門委員長より、自身の指導案を例に、指導案を書くときの留意点をあげてもらった。「良い指導案が書ければ良い授業ができる」とのアドバイスがあった。

(4) 講師の先生より、「川口プランのカリキュラム開発プロセス」(信州大学教育学部紀要第113号)を資料にご指導いただいた。

- ・戦後間もないカリキュラム開発実践には優れたものがある。「主体的に問題解決する」というカリキュラムデザインが見られる。

第3回 3月24日(土)

(1) 各自の研究授業の指導案を持ち寄り、協議を進めた。協議の中で、以下のことがまとめられた。

① オリンピック・パラリンピック教育との関連について

- ・「スポーツから見る世界地理」ワークシートの紹介
- ・地図帳の活用

② 副読本「地域を知る」の扱いについて

- ・各区市町村で作成されている副読本は、資料が豊富なので、うまく活用する必要がある。
- ・歴史的分野では、その地域の特徴をよく表している時代を取り上げると、生徒の興味・関心も高い。
- ・歴史を取り上げるときに、地形図にも着目させると良い。

③ 討論のさせ方について

- ・ 現実の問題としてとらえやすい課題が良い。
- 例) 「なぜテロリズムの対応は難しいのだろう」
- ・ 生徒の発達段階に応じた資料の提供が望ましい。

(2) 先進事例として、以下について紹介があり、協議した

- (i) 社会系教科教育学会研究発表大会として、  
「パフォーマンス評価から構成する中学校社会科単元設計」の発表
- ・ 多様な見方・考え方ができるようなパフォーマンス課題の提案
  - ・ 「逆向き設計論」に基づく単元設計のやり方
- 【第1段階】学習指導要領から単元の目標・内容を抽出する。  
【第2段階】「ストランド」を参照し、単元の目標・内容を決定する。  
【第3段階】目標が達成できたかどうか、生徒の学びを捉える評価を決定する。  
(パフォーマンス課題の決定)  
【第4段階】具体的な単元計画及び授業構成を決定する。
- ★単元設計の在り方等について、質問、協議を進めた。

- (ii) 東京都研究開発委員会（中学校社会科）研究発表会から
- ・ 「学びに向かう力」を育てる4種の問いについて
- ① 「次に向かう問い」（関連する社会事象に関心が向かう問い）
  - ② 「深める問い」（学習した単元に関係する内容をもっと掘り下げようとする問い）
  - ③ 「関連付ける問い」（学習した内容と自分たちの生活との関連を知ろうとする問い）
  - ④ 「振り返る問い」（学習した内容の不十分さを補おうとする問い）
- 4種の問いを問いかけることで、生徒の「学びに向かう力」が育つ。
- ・ 生徒の感想は、「学びに向かう力」の検証に役立つ。
- ★単元を貫く課題は、単元構造の中で中核をなすものであり、そのためには生徒の思考を方向付ける「問いの質」が求められる。

(3) 研究報告として、以下の実績報告がされた。

- (i) 3月4日に行われた「フィールド・イン・ジャパン」（全国中学校地理教育研究会主催）での発表として
- 「創立40周年記念 地域調査」府中市立府中第九中学校 生徒発表
- ・ 調査、発表に臨んだ生徒代表者が、当日の発表の再現をした。
  - ・ 発表後、参加者の教員からたくさんの質問を受けた。生徒自身にとっても大きな自信となった。
- 講師の先生から、以下の指導があった。
- 生徒が地域に誇りをもてるようになるのが、「地域調査」の最大の魅力である。  
「フィールド・イン・ジャパン」のような発表会に皆もぜひ参加すると良い。

(ii) 板橋区 ICT 実証実験校 第 2 回公開授業

「身近な地域の調査」の授業報告から

- ・ GIS（地理情報システム）を活用して、地域的特色を多面的・多角的に明らかにしていく。
- ・ GIS の中で、国土地理院の「地理院地図」や「今昔マップ」、国土交通省の「重ねるハザードマップ」を活用した。また、3D プリンターで製作した「身近な地域の立体模型」も活用した。

→参加者の多くは、初めて「地理院地図」を見、多くの情報が詰まっていることに驚きを隠せない様子であった。手軽に活用できる資料が豊富であることがわかった。

→講師の先生から、以下の指導があった。

高等学校の新学習指導要領社会科では、必修科目に「地理総合」が新設され、GIS の活用が求められている。中高の接続が今後求められていく。

(4) 講師の先生より、以下についてご指導いただいた。

①平成 30 年度の移行措置についての確認

平成 31 年度については、今の教科書で新学習指導要領の通りの時数で行う。

②単元を貫く課題について

- ・「生徒主体」となっているか、「教師主体」であるかをもう一度吟味する必要がある。
- ・最終的には、身近な地域の歴史等に深めていけると良い。

【成果と課題】

(1) 成果

- ①指導案やワークシート、定期考査問題を基に実践報告をし、研究協議において、意見交換をすることにより、「明日の授業」に生かす、より実践的な指導法工夫に結びつ

(iii) 東京都中学校社会科教育研究会 三分野合同研究発表会の参加者より、報告がされた。

けることができた。

- ②各地区での公開授業や研究授業を引き受ける若手教員が増えてきたことにより、教材研究に深みが出てきており、協議も活発になってきた。また、研究開発委員や各種学会等での発表等の先行事例も多く出され、それを基に協議を深めることができるため、年間指導計画や3年間を見通した資質・能力の育成にも目が配れるようになってきた。

- ③都中社研研究部員をはじめ、指導教諭、参加した校長、顧問の先生に毎回、複数参加

していただくことにより、より専門的なアドバイスをいただくことできている。また、今後の社会科教育の方向性を知る機会となっている。

- ④都中社研の事業のほか、各種の研修会を紹介することにより、多摩地区の若手教員の研修意欲を高めることができた。

## (2) 課題

- ①若手教員の指導力向上を図るため、実践事例を紹介するだけでなく、共通の課題を提示し、継続して研究を進め、「公民としての資質・能力の育成」ができる指導法の工夫・改善を図る必要がある。